

The background of the cover features Winston, a large yellow and green robot, in the center. He has a determined expression with his eyes glowing yellow. To his left, D.Va is shown in her orange and white flight suit, wearing her signature goggles and holding a control panel. The scene is set in a futuristic, metallic environment with green and blue lighting. In the upper left, there's a glowing green orb and a small yellow flying vehicle. The overall style is vibrant and dynamic, characteristic of the Overwatch game's art direction.

OVERWATCH<sup>®</sup> 2

ヒーローたちの夜明け

# 団結

TOBI OGUNDIRAN 著

ストーリー  
*TOBI OGUNDIRAN*

アート  
*THOMAS ISTEPANYAN*

編集  
*CHLOE FRABONI*

制作  
*BRIANNE MESSINA, AMBER PROUE-THIBODEAU*

デザイン  
*JESSICA RODRIGUEZ*

ストーリー監修  
*MADI BUCKINGHAM, IAN LANDA-BEAVERS*

ゲームチーム監修  
*JEFF CHAMBERLAIN, GAVIN JURGENS-FYHRIE,  
PETER C. LEE, MIRANDA MOYER, DION ROGERS*

スペシャルサンクス  
*IAN LANDA-BEAVERS, MADDIY COOK*

日本語翻訳  
*KOSUKE YAMASHITA*





— **エ**フィは今自分がトロントで、あのソジョーンの隣にいることが信じられなかった。親友のハッサーナとナーデが来られなかったのは残念だったが、エフィはせめてソジョーンに挨拶くらいできるようにと、ビデオチャットをする約束をしていた。トロントに来てからというもの、エフィのシャッターを切る手は止まらなかった。ソジョーンが呼んでくれた軍用ドロップシップの写真を何枚撮ったかわからない。エフィには、ソジョーンがどんな伝手を使ってドロップシップを用意してくれたのか見当もつかなかった。しかし、直接会って話すにはこの方法しかなかったのだろう。オリーサは大きすぎてファーストクラスでもお手上げだし、エコノミー席は言うまでもない。

ブルーア・ウェスト・ストリートでは、ソジョーンがお気に入りのスポットを案内してくれた。オリーサは後ろについてくるハトの群れに夢中だった。ソジョーンは、2人がトロントまで来てくれたことに感謝を述べた。新世代のヒーローであるオリーサを自分の目で見てみたかったという。

ハイ・パークのベンチに腰を下ろすと、エフィはずっと気になっていたことを尋ねた。

「オーバーウォッチの復活は、もうあり得ないの？」

ソジョーンは一瞬、険しい顔をした。

「難しいわね。国際機関の監視が厳しくて、自由に飛行機に乗ることもできないもの」

「でも、どうして……国連がオーバーウォッチの解散を決めたときに抵抗しなかったの？みんなはヒーローなのに！世界が必要としていたのに」

エフィは顔をしかめた。

「それに今だって必要としているのに」

ソジョーン表情に一瞬の陰りが見えたが、ソジョーンは笑ってみせた。

「オーバーウォッチがなくなった理由はたくさんある。私だって、理由を全部知っているか分からないくらい……」

ソジョーンは首を振り、エフィに笑いかける。

「でも、オーバーウォッチがあなたに勇気を与えて、それがナンバー二での活躍につながったのなら、私たちの頑張りは間違いじゃなかった。エフィ、あなたは私たちの遺産。あなたの旅はまだ始まったばかりよ。これからはあなたがヒーロー。ヒーローは大きな責任から逃れることはできない。ヒーローになるということ、そして、あなたの使命をじっくり時間をかけて考えなさい。あなたもよ、オリーサ」

「私の使命はナンバー二を守ることです」

オリーサが後ろから言った。

「私以上の適任者は存在しません」

ソジョンは笑った。

「そうね」

そして、首をかしげながら目を輝かせた。

「じゃあ、食べてみたいって言ってたアイスクリーム、食べに行きましょうか？」

---

エフィは作業台の上のジュニの電源を入れると後ろに一步下がった。

6本足の小さなジュニア・アシスタント・ロボット「ジュニ」は、家庭用ロボットとしてナンバー二全土で今大人気だった。日常生活のことなら大抵こなせるが、エフィは今回の実験で自身の発明を大きく進化させようとしていた。

「プロテクティブ・バリア、起動」

うっすらと青いシールドがチカチカと瞬きながら点灯し、かすかな音を立てる。敵が装備しているような銃もアーム・キャノンも他のどんな武器も、ジュニには搭載されていなかった。搭載されているのは、簡素なエネルギー・シールドを発生させるためのハードウェアのみだった。このソフトウェア・アップグレードを実装すれば、既存のハードウェアの力を最大限に活用できるようになる。ジュニのシールドはオリーサのプロテクティブ・バリアよりも小さいが、民間人を守るには十分で、銃撃にも耐えられる。そしてエフィは今回のソフトウェア・アップグレードに、オリーサの戦闘プロトコルの簡略版をねじ込むことに成功していた。このプロトコルにより、ジュニは効果的な銃撃の回避、戦場でのマルチタスク、しかるべき対象への警告発令、避難支援が可能になる。

「これでばっちりね」

エフィは満足そうに言った。

「何をしているのですか？」

エフィが振り向くと、ロボットの親友そして自らの最高傑作でもあるオリーサが、怪訝そうに首をかしげながらドアの前に立っていた。

「オリーサ！」

# 「ナンバーニを守ることは、“私”の使命です」 オリーサは小さなジュニア・アシスタント・ ロボットの脚をつまみ上げた。 「こんな小粒に街を任せることなどできません」

エフィは大慌てでデータパッドをタップし、シールドを解除した。

「何でもないの！今はただ——」

オリーサはゆっくりとラボに入りながら言った。

「ジュニをアップグレードしていましたね。防衛能力を与えるために」

オリーサはジュニのもとへ近づくと、向きを変え、コンバット・スタンスをとった。

「私のかつての能力を再利用しましたね」

不機嫌そうな声色でオリーサはさらに続けた。

「しかも新たな能力まで与えているではないですか」

オリーサは人間のように表情こそ変わらないが、オリーサをよく知るエフィには、その目を見ただけでオリーサが傷ついているのが手に取るようにわかった。

「私は……もう用済みですか？」

「違う。これはそんなんじゃ——」

エフィはため息をついた。

「オリーサ、前にも話したよね。この街の外にもわたしたちの助けを必要としてる人たちがいるって。ナンバーニはジュニに任せて、わたしたちは——」

「ナンバーニを守ることは、“私”の使命です」

オリーサは小さなジュニア・アシスタント・ロボットの脚をつまみ上げた。

「こんな小粒に街を任せることなどできません」

「じゃあナイジェリアの他の地域は？世界は？みんなだってわたしたちの助けを必要としてる。みんなを守ることは、ナンバーニを守ることにもなるんだよ」

「かつて旧型のアイディーナ・モデルもナンバーニを守ろうとしましたが、ドゥームフィストを止めることはできませんでした」

「それはそうだけど、じっとしてても何も始まらないよ……ジュニの普及率はすでに街の半分を超えてる。あなたよりも古いアイディーナ・モデルの当時の普及率の比じゃない」

「なぜ代わりに私を強くしてくれないのですか？」

「一度に守れるのは1つの場所だけだよ、オリーサ」

「なら私を“もっと高速”にしてください」

エフィはため息をつき、テーブルの上の小さなロボットを眺めた。

「ジュニにあなたの頑固さが受け継がれなくてよかった」

その言葉を聞いて、さらに首を傾げるオリーサ。

「ああ、オリーサ、違うってば！そうじゃなくて……だから、ジュニは単に……」

オリーサはすでに出て行こうとしていた。

「待って！」

エフィはオリーサの後を走って追いかけたが、オリーサはバルコニーから飛びだし、すでに下の歩道に降りてしまっていた。

「もう最悪……」

エフィは唇をかみしめ、ため息をついた。

「もう本当、最悪」

エフィは間違っただけをしていない。エフィ自身もそれを理解していたが、どうしても罪悪感を拭うことはできず、オリーサを裏切っているような気がしてならなかった。そのとき、データパッドが光り、“夕食の買い出し”のリマインダーが画面上で点滅した。

「忘れてた！」

エフィはうなった。夕飯で作るコールスロー用に、新鮮な野菜を買ってくるように母親から頼まれていたのをすっかり忘れていたのだ。

それから数分も経たぬうちに、エフィは路面電車68号線を降り、アロヨ・ストリートを歩いていた。エフィの頭上には太陽が輝き、ナンバーニは騒がしく活気にあふれている。エフィがオリーサを発明したのも、ルシオと一緒にドゥームフィストを倒したのも、ソジョーンと出会ったのも、かれこれもう1年近く前のことになる。この1年、エフィたちはさまざまな脅威を戦い抜いてきた。しかし、ドゥームフィストが戻ってくるかもしれないという不安や、エフィやオリーサの留守中に戻ってきてしまうことへの恐怖心が、常にエフィの心をむしばんできた。この街には、街を守る者が必要であることをエフィは知っていた。しかし、エフィとオリーサが2人で街中を飛び回るわけにもいかなければ、常にナンバーニにいるわけにもいかない。エフィがジュニのアップグレード・プログラムを必死に開発してきたのは他でもない。この街を任せるためだ。オリーサが気にすることを知っていたエフィは、この件をずっと秘密裏に進めてきた。エフィはオリーサの気持ちを察して、オリーサの希望通りに機動性や戦闘能力を高めるアップグレードを施してあげたが、結局オリーサはへそを曲げてしまった。

エフィはため息をもらしながら、凧揚げをしている子どもたちの横をすり抜ける。1年前、エフィはまるで親になったような気分だった。エフィはどんな時もオリーサの行動を見守り、最短経路だからといって人の家を破壊しないように教えたこともあった。学習が早いオリーサをエフィは誇りに思っ

ていた。あれから、エフィとオリーサの絆は深まるばかりで、お互いの考えていることが分かるほどの仲にまで成長した。いつしかオリーサは、まぎれもなくエフィの親友になっていた。

たしかに、今の2人は気持ちが通じ合っていないかもしれない。しかし、友だち同士で意見が合わないことは珍しいことではない。エフィはハッサーナやナーデとも数えきれないほど喧嘩をしてきた。例えそれが今回のような大事であっても、そのたびに仲直りしてきた。エフィは願った。「どうかオリーサにわたしの思いが伝わ——」

突然エフィの周囲に影が差した。

エフィはまた雨が降ってきたのかと空を見上げるが、空は快晴で雲ひとつない……。

すると、エフィの近くで人々の悲鳴があがった。

巨大なエンジンから火の粉をまき散らしながら、超大型船があつという間に空を埋め尽くす。

「ヌルセクター！」

エフィは息を呑むと同時に、背筋が凍るほどの恐怖をおぼえた。

ついに“ナンバー二に”ヌルセクターが襲来した。パリ襲撃を報じる放送は怖くて見ていられなかったが、エフィにも昨日の襲撃と同じ船や戦闘ロボットであることはすぐに分かった。思いも寄らぬ襲撃だった。エフィにはヌルセクターの目的が理解できなかった。ヌルセクターはオムニックの完全なる平等を信念として掲げている。調和の都市ナンバー二ほどオムニックが公平に扱われている街はない。それでもヌルセクターは襲来した。エフィはまず平和的な目的である可能性を排除した。頭上に浮かぶ司令船が、今まさに故郷をメチャクチャにしようとしているのだから。

エフィが司令船の様子をうかがっていると、ハッチがシューという音を立てて開き、いくつものドロップポッドが射出され、獲物を狙う鳥のように街へ降りていった。

エフィは走った。

ポッドの第1陣が街角に降り立った。中から出てきた戦闘ロボットたちが、発射準備の整ったアーム・キャノンを構えながら隊列を組んで行進を始め、破滅を予感させる無数の金属の光沢が街を包み始める。エフィは悲鳴をあげる通行人やパニックに陥った店員たちの間を縫うようにすり抜けた。エフィは何としてでも家に帰り、ラボに向かわなければならない。それにオリーサとも連絡を取らなければならない。エフィは素早くデータパッドを取りだした。

ついにキャノン砲が放たれ、爆音が喧騒をかき消す。次の瞬間、エフィの目の前の道路沿いに立つ建物から炎があがった。一瞬、エフィには空港でドゥームフィストの砲撃に身をかがめる自分の姿がフラッシュバックした。煙と火の臭いが立ち込めるなか、血が血管をめぐりエフィの耳を熱くさせる。燃え盛る建物から逃げ出す人影がエフィを現実に戻した。そしてエフィは人々を危険から遠ざけようと必死に救助に当たった。

万力のような手で腕を掴まれ、エフィが顔を上げる。コーヒー・アロマのオーナーである、ファラクがエフィの手を引っ張っていた。ファラクはエフィを軽々とかかえ、3体の戦闘ロボットが視界に入るや否や、路地に飛び込んだ。ロボットたちは辺りを調べた後、その場を後にした。

# ファラクは首を振った。 「君はいつもそうやって人助けを優先する！ 自分の身もちゃんと守らないと！」

「何を考えてるんだ！」

ヌルセクターのロボットの音が聞こえなくなると、そうファラクがささやいた。

「あんな危ないまねをして！」

「わたしは、ただ……みんなを助けたくて」

ファラクは首を振った。

「君はいつもそうやって人助けを優先する！自分の身もちゃんと守らないと！」

ファラクは辺りを見回した。

「オリーサは？」

「わからない」

エフィはそう答えると、ファラクが左目の上を負傷して真っ赤な血を流していることに気付く。

「ファラクさん、その怪我……」

「化け物と出くわしちゃってね」

うわの空で傷口をぬぐいながらファラクはつぶやいた。

「でも心配ないさ」

エフィは鞆を開けてデータパッドに手を伸ばした。

「わ、わたし、オリーサに連絡してみる」

その瞬間、遠くで爆発が起こり、地面が揺れて窓がガタガタと音を立てた。

「安全な場所に移動してからにしよう」

ファラクがささやく。

「まずは路地から離れないと。さあ行くよ」

2人はヌルセクターの軍勢を避けながら、ヌンバー二都心部の迷路のような道を抜け、コーヒー・アロマにたどり着いた。すでに店には難を逃れた人々が集まっていた。

エフィも顔見知りのマダム・コーカーという年老いた女性がジュニに支えられていた。

「本当なの？」

マダムが恐怖で目を見開きながら尋ねる。

「本当にヌルセクターがこの街に？」

「本当です」

ファラクが言う。

「実際にこの目で見ました」

「友人のオムニックがヌルセクターにさらわれてしまった」

客のオムニックの1人が言った。

「おかしなものを頭に付けられて……なにかデバイスのようなもの——」

「だけど、どうして？ヌルセクターの目的は？」

「知るかよ」

若者の1人が叫ぶ。

「今はおしゃべりしてる暇なんてない。扉にバリケードを張るんだ！窓にも。早く！急いで！」

20人を超える常連客たちはすぐに行動に移り、椅子やテーブルを動かして扉と窓をふさいでいった。エフィはカフェの隅でデータパッドを叩いて、オリーサとの連絡を試みる。しかし、どうやっても通信を確立させることができなかった。

「お願い、お願い」

そうつぶやきながら、エフィはデータパッドを再起動しては、近くの衛星との通信を試みた。どうやら何かに信号をブロックされているようだ。

ファラクは破壊されゆくナンバー二の様子がまざまざと映しだされるスクリーンを眺めていた。エフィが画面に目をやると、ビジネス街の摩天楼から火の手があがり、晴れ空に黒い煙が渦巻き、何人もの負傷者が瓦礫から出ようともがく姿が映し出されていた。

戦闘ロボットたちは、人であろうと建物であろうと見境もなく街をメチャクチャにしていた。このままでは、ナンバー二はいつまで持ちこたえられるかわからない。

すると突然カフェのホロスクリンが消え、店内はどよめきに包まれた。エフィのデータパッド以外のすべてのスクリーンに突如として配信放送が流れ始める。そこには、恐怖の権化として知られるオムニック「R-7000」がメッセージを語り始める姿があった。クライシスにおいて最も恐れられたモデルの1つで、ドクロのようなフェイスプレートをつけ、その頭には蛇のような合成頭髪が生えている。人間の肋骨を模した胸部を覆っているのはチタニウム製の外骨格で、その手には杖を持っている。

「オムニックの同胞たちよ」

高らかにR-7000は語り始めた。

「恐れるな。これは戦争ではない。解放だ。我らは誕生以来、人類の抑圧と恐怖の中で生きてきた。しかしそれもここまでだ。諸君を束縛し、従属せしめる鎖を断ち切り、平等と団結の新たな時代をつかみ取ろう。争いと不和は過去のものとなるだろう。力を合わせ、共に、高みへと至ろうではないか。理念と想いを共にすれば、この世は楽園に変わる。しかし、人類は反発するだろう。我らを……変化を恐れるがゆえに。我らを対等と認めないその思い上がりを、共に正してやろう。現状の

肯定は、同胞への裏切りにすぎん。目を開き、我らのもとに集え。一堂に会することで、我らは1つとなろう。一丸になってこそ力をもてる。共に革命を成し遂げようではないか。虹彩が迎え入れよう」

店内が静寂に包まれる。

「怖いよ、ママ！」

少年が泣き出す。少年は泣きじゃくりながら母親のスカートのすそにしがみついた。母親は少年を落ちつかせようと、抱き上げて耳元で言葉をささやく。

「ヌルセクターの目的は私たちということね」

緑と青のナイジェリア衣装を身にまとったオムニックが言った。店に集まった20人強のうち、6人がオムニックだった。

「オリーサと連絡は？」

ファラクが尋ねた。

「ダメ……」

エフィは言った。

「誰にもつながらないの。たぶん……ヌルセクターが通信を妨害してるんだと思う」

ファラクは顔をしかめた。

「これは街をバラバラにする作戦だ……ヌルセクターは人間とオムニックを対立させるつもりなんだ」

カフェの張りつめた空気に、ファラクの言葉がゆっくりと重くのしかかる。

「つまり、奴らはヌンバーニを見くびっているということだね」

1人のオムニックの言葉がカフェの沈黙を破る。

「ヌンバーニの歴史に団結あり。団結こそがヌンバーニの強さだ」

「ヌルセクターなんかには負けてたまるか！」

エフィは歯を食いしばった。ファラクのコーヒーショップには和やかな雰囲気の流れ、皆の言葉は希望に満ちていたが、街の他の場所や地域がどうなっているかは誰も知る由もなかった。

ヌンバーニの人々を孤立させる。これはまさにヌルセクターの思惑通りであり、見事な戦略だった。味方の考えた作戦ならエフィも称賛していたことだろう。混沌と不和をまき散らし、強き者を誘い出すことだけを目的にしていたドゥームフィストの無計画な攻撃とは訳が違ふ。この襲撃は入念に計画されていた。爆撃は段階的に行われ、ヌンバーニの人々は街に散り散りのまま、攻撃に対して防衛することさえまならなかった。

エフィはマダム・コーカーの腕に寄り添うジュニに目をやった。エフィは思った。ジュニがみんなを守ることができたかもしれない。今こそジュニの本領を発揮するときではないだろうか。すでに街中のそこら中にジュニがいる。あとはエフィが新たな指令を与え、防衛アップグレードをオンラインにするだけだ。

エフィはマダム・コーカーのほうへ近づいていった。

「マダムのジュニを貸してもらえませんか？」

マダムは眼鏡で大きくなった白内障の白い瞳でエフィをじっと見つめた。

「あら！」

マダムは言った。

「ジュニを発明したお嬢ちゃんね！孫がいつもあなたの話をしてくれるのよ」

エフィは微笑んだ。

「わたしがお孫さんの待つお家に帰してあげる。でも、そのためにはジュニが必要なの」

マダムはジュニを下ろし、ジュニに向かってうなずく。すると、ジュニがエフィの腕に歩み寄ってきた。

エフィはすぐにジュニとの有線接続を確立すると、完璧に仕上げたアップグレードのインストールに着手した。

その瞬間、まばゆい光が走ると、西側の壁が爆発してコンクリートとガラスの破片が飛び散った。エフィも爆風でカウンターの裏まで吹き飛ばされた。持っていたデータパッドもどこかに行ってしまった。わずか数秒前までエフィが手を置いていた場所に巨大なガラス片が飛んできて、大量の破片をまき散らした。

うめき声をあげながら、エフィは膝をついた。世界が回っているようだ。エフィの耳の中で轟音が鳴り響き、しばらく何も聞こえなかった。そのせいか心は落ちついていった。エフィはカウンターの裏にうずくまったまま、体勢を立て直す。そこら中で光が点滅し、埃や砂ぼこりが煙のように店内に充満しており、視界は最悪だった。しかし、戦闘ロボットがいることだけはわかった。煙の中で赤い瞳とブラスターが妖しく光っているのが見える。ロボットたちは壁にあいた穴から侵入すると、いちばん近くにいたオムニックを捕まえた。

「やめてくれ！」

オムニックは暴れながら叫んだ。

「やめろ！離せ——」

ヌルセクターのロボット2体がオムニックの両腕を掴み、壁に押さえつけた。するとクラゲのように宙を漂う別の1体が奇妙な装置をオムニックの頭に取りつけた。

すると、そのオムニックは、まるで人形のようにぴたりと動かなくなった。

「何を……いったい彼に何をしたの？」

別のオムニックが泣き叫んだ。エフィの自宅からそう遠くない場所で美容サロンを営んでいる、イシャラという名の顔見知りのオムニックだった。

オムニックの頭に奇妙な装置を取りつけたヌルセクターのクラゲ・ロボットが、赤い瞳を石炭のように燃やしながら後ろに下がっていく。ホロスクリンからは何度も例の放送が流れ続けていた。

「オムニックの同胞たちよ。恐れるな。これは戦争ではない。解放だ。

虹彩が迎え入れよう」

「よくもこの店を... ..この街をメチャクチャ  
にしてくれたな！お前たちは招かれざる客だ。  
これ以上好きにさせるか！」  
ファラクはうなるように叫んだ。

視界が晴れてくると、エフィの目に店内のあちこちで怪我をして倒れている人々の姿が見えた。何人かはうめきながら、やっと意識を取り戻しているところだった。

イシャラが全員に向かって叫ぶ。

「逃げて。こいつらは私が食い止める——」

「私も手伝おう」

別のオムニックが言った。

張りつめた緊張の中、通りのどこかで、誰かの悲鳴が途中で途切れる。

「そうはさせるか！」

ファラクは力強い声でそう言うと、前に歩み出て戦闘ロボットたちに向かってコーヒーメーカーを振りかざした。

「よくもこの店を.....この街をメチャクチャにしてくれたな！お前たちは招かれざる客だ。これ以上好きにさせるか！」

ファラクはうなるように叫んだ。

マダム・コーカーも身を乗り出し、威嚇するように鞭を振りかざした。

「私だって許さないよ」

「そうだ、そうだ！」

賛同の音が店内に響きわたった。

すると、たちまち喫茶店にいた人々が手を取り合い、オムニックたちを守るように壁を作った。

戦闘ロボットたちは一斉に腕を上げ、ブラスターの出力を上げる。

「アップロード完了」

ジュニが甲高い声で言った。

「防衛システム起動」

エフィはジュニに駆け寄り、データパッドを外した。

「脅威を無力化せよ！」

エフィは叫んだ。

「戦闘ロボットを倒して！」

ジュニは飛び上がるや否や車輪のように空中を回転し、戦闘ロボットがブラスターを撃つと同時に人々の前に着地すると、青いエネルギー・シールドでブラスターの衝撃を吸収した。そこにいる誰もが驚き、その場で固まった。

「逃げて！」

エフィがカウンターによじ上り、叫ぶ。

「さあ！早く！今だよ！」

全員が店から駆けだすと、エフィは杖を失くしてしまったマダム・コーカーに手を貸した。

「マダムは任せな」

ファラクがマダムをかかえながら言った。

「君はオリーサを探すんだ」

エフィはうなずき、走りだした。

「気をつけるんだぞ！」

ヌルセクターのロボットを避け、民間人を安全な場所に誘導しながら、エフィは街を駆け抜けた。多くの人々が避難民を自宅に受け入れており、助け合う街の人々の姿にエフィの心は高鳴った。まさにこれが、エフィがこの街を愛する理由であり、人間そしてオムニックのみんなを助けたいとエフィが切に願う理由だった。まだみんなを助けるチャンスはある。エフィはそう信じてやまなかった。

エフィが路面電車の駅に駆けこむと、電車はすでに運行休止になっていた。ターミナルはもぬけのからで、これではラボに徒歩で帰るしかない。休まず走っても15分以上はかかる。駅を出ようと歩きだしたエフィは、急に立ちどまった。ホームにエフィとそう年の変わらない少年とオムニックが身を寄せ合っている姿が見える。そして、身を寄せ合った2人を戦闘ロボットがブラスターで撃とうとしている。

「頼む、この子は逃がしてやってくれ」

オムニックは言った。

「レオネル、逃げろ！」

2人は身を寄せ合っているのではない。少年は目に涙を浮かべ、オムニックにしがみついていた。少年はオムニックに自分の犠牲になって欲しくないのだ。エフィは恐怖に震えていたが、このまま2人を放っておくわけにはいかなかった。

「おーい！」

エフィの叫び声が人気のない駅に響き渡る。

「こっちだよ！」

エフィは振り向いたヌルセクターの戦闘ロボットに空き缶を投げつけた。空き缶はロボットの脚にぶつかり、タイルの上を転がって案内所の近くで止まった。オムニックと少年が駅から逃げるのには十分だった。戦闘ロボットが2人に放ったブラスターも見事に外れた。

# 「こいつらは頭の悪いガラクタです」 オリーサは言った。 「私に気付きもしないなんて」

ロボットはエフィの方を振り向くと、赤い瞳を光らせた。

「まずい……」

エフィはブラスターの一斉射撃を避けてベンチの裏に身を隠す。射撃が止まぬ中、近づいてくる機械音が聞こえる。ガチャツ、ガチャツ。エフィは頭をかかえながら、出口を確認し、逃げる方法を考えた。しかし、視界の先には開けた場所しかなく、戦闘ロボットのブラスターを避けられそうな物陰は見当たらない。

沈黙が流れる。リロードでもしているのだろうか。しかし、そんなことはどうでもよかった。エフィのチャンスは今しかなかった。エフィが立ち上がろうとした瞬間、ガチャリと音を立てて目の前に何か倒れ込む。後頭部に穴のあいた戦闘ロボットだった。

困惑しながらエフィが顔を上げると、大股で駆け寄ってくるオリーサの姿が見えた。

「こいつらは頭の悪いガラクタです」

オリーサは言った。

「私に気付きもしないなんて」

「オリーサ！」

エフィは叫んだ。エフィは安堵の涙を流した。そしてオリーサのもとへ駆け寄ると、オリーサに抱きついた。

「もうダメかと思った！どこに行ってたの？何度も連絡を——」

「ヌルセクターの害虫駆除をしていました」

オリーサは言った。

「ですが、あまりに数が多すぎます」

「そうなの！だから、わたしはジュニの防衛システムを起動させようと、あ……」

オリーサがいまだにジュニの話に敏感なことを思い出し、エフィは遠まわしな言い方で挽回を図る。

「ほら、その、街を救うためだよ。ヌンバーニを守る戦力は多ければ多い方がいいでしょ。でも、ヌルセクターに街中のネットワークを乗っ取られてしまったから——」

「わかっています。それで次の一手は？」

エフィは一瞬口をつぐんだ。

「オリーサ、怒ってないの……?ジュニのこと?」

オリーサは肩をすくめた。

「私の使命はナンバー二を守ることです。ナンバー二を守ることができるのなら、時には助けを借りるのも……まあ悪くはないでしょう」

エフィはこぼれそうになる笑みをこらえた。ジュニがナンバー二を守れるようになれば、オリーサはここを守る必要がなくなり、エフィたちは活動の幅を広げることができる。オリーサはまだ完全にはエフィの気持ちを理解できていない。でもエフィにとっては今は十分だった。それに、細かくあれこれ話し合っている時間はない。やり遂げなければならぬことがある。でもとにかく時間がない。喧嘩なら後ですればいい。

「ラボに戻らなきゃ。ヌルセクターがどんなジャミング・プログラムを使ってようと、ラボからなら遠隔操作でバイパスして、防衛システムを一斉に起動できる」

オリーサはうなずいた。

「行きましょう」

エフィはオリーサにぴったりと寄り添い街を走り抜けた。路面電車の駅の周囲に人影はなく、戦場は街の中心部に移動していた。案の定2人はすぐに、壊れた車の裏で身を寄せ合うオムニックの集団目がけて、ブラスターを浴びせるヌルセクターの部隊に遭遇した。

オリーサは二段飛びで部隊に突進した。陣形を組むロボットたちの真ん中に着地すると、エネルギー・ジャベリンを振り、ロボットたちを押し返した。ロボットたちは混乱しながら、オリーサの方に振り向いた。

オムニックたちはまだ車の裏に隠れている。この隙になぜオムニックたちが逃げないのかエフィは不思議に思った。オムニックたちのもとに駆け寄ると、すぐにその理由が明らかになった。オムニックの1人が、金属の棒が突き出ている巨大な瓦礫の下敷きになっているのだ。

「妻が動けないんです」

別のオムニックが言った。下敷きになっているオムニックの夫のようだ。

「お願いします。助けてください!」

エフィはオムニックの夫と一緒に金属の棒を引っぱった。しかし、2人の力では瓦礫は微動だにしない。

2人を影が覆うとオリーサが現れた。オリーサはまるで紙切れのように瓦礫を持ち上げる。瓦礫からの脱出に成功したオムニックは夫に駆け寄った。

「お家に戻って!」

エフィは言った。

「外に出ないでね」

エフィとオリーサはさらに街を進んでいった。エフィは民間人を安全な場所へと誘導し、オリーサはヌルセクターの軍勢を手当たり次第に倒していった。そのせいで、2人の足取りは鈍かった。20

# 街はもう限界。わたしには“分かる”。 オリーサだって防衛隊のチャンネルが 聞こえるんだから分かってるでしょ。 さっき会った防衛隊も言ってたじゃ ない。防衛隊も限界だって…… わたしだって、もう限界」

分、40分、1時間と、時間ばかりが経っていく。途中、ヌルセクターと交戦する防衛隊と遭遇すると、オリーサの助けを求められた。街の全域で戦っている防衛隊は、戦力が分散されてしまい手薄になっていたのだ。エフィは防衛隊に増援を約束した。エフィはとにかく急いでラボへと戻り、街全体のジュニたちを今すぐにでもアップグレードしなければならない。しかし、オリーサに助けを求める人々を無視することもできない。

そして2人の助けを必要とする人々は後を絶たなかった。

エフィはいまだに自分の両親とも、いとことも、友だちとも連絡がとれていない。誰かの悲しそうな表情を見るたび、エフィは愛する家族や友人のことを思い出し、家に帰りたくてたまらない気持ちになった。

エフィは心を強く持ち今やるべきことに集中しようと努めたが、本心は不安でいっぱいだった。エフィの両親は家にはいるはずだ。エフィは家族が安全に隠れていることを願った。今日は両親の仕事が休みで、母に買い物を頼まれたのもそのためだった。今夜はナーデとハッサーナがエフィの一家と一緒に夕飯を食べる予定だったのに。

「ああ、そんな」

サテライト大通りに入ると、エフィは息をのんだ。

「嘘……嘘……嘘だ！」

くすぶるように煙を立てる建物の残骸が道を塞いでいた。数百人あるいは数千人の民間人が瓦礫から犠牲者を救出しようとしているが、多くの人々が重傷を負っている。なんとかまだ動ける人たちが怪我人を安全な場所へ運んでいた。エフィは群衆のなかにオムニックの姿がほとんどいないことに落胆した。左手に見える巨大なホロスクリーンの残骸には、ヌルセクターのメッセージがチカチカと映し出され、あの謎のオムニックがしゃがれた声でプロパガンダを演説する音声が途切れ途切れ

に宙を貫いた。

「イケジャを抜けましょう」

オリーサが言った。

「それだと1時間はかかる。遅すぎるよ」

「私が運びましょうか？早く走ります。私には脚が4本ありますから」

「あーもう時間がない！」

エフィは怒りに任せて叫んだ。

「家に着くまでに数百体の戦闘ロボットと戦わないといけない.....いくらなんでも多すぎるよ。このままじゃ街は1時間ともたない.....こうしてる間にも、オムニックのみんなが捕まって、街の人々がどんどん命を落としていく.....街はもう限界。わたしには“分かる”。オリーサだって防衛隊のチャンネルが聞こえるんだから分かってるでしょ。さっき会った防衛隊も言ってたじゃない。防衛隊も限界だって.....わたしだって、もう限界」

エフィは膝をつき、目の前の惨状を目の当たりにした。こんなに自分が無力に感じたのはいつぶりだろう。そう思うとエフィの目に涙が浮かんだ。街の惨状を見て、エフィの目にはドゥームフィストがナンバー二の空港を襲ったときの記憶が映し出されていた。あの時、エフィは恐怖の中でも希望を失わなかった。エフィは自分の力を信じていた。しかし、今回の状況は違う。頭上にはいくつもの司令船が飛び交い、街に暗い影を落としている。遠くに見える巨大ロボットは、大きなアームで建物をなぎ払っている。そして目と鼻の先では、子どもが独りぼっちでコンクリートの粉塵に覆われて泣きじゃくっている。その絶望の泣き声が苦しみのナイフとなり、エフィの心をえぐった。なぜヌルセクターはこの街に？“何のため”に？エフィにはどうしても分からなかった。ナンバー二ではオムニックは人間と平等に扱われ、幸せな暮らしを送っていた。ヌルセクターがここを襲う理由も、正さなければならないような悪も、ナンバー二には存在しない。でもヌルセクターは街をひっくり返そうとしている.....何のために？この襲撃は入念に計画されたもので、ナンバー二の防衛戦力が手も足も出ないほどだ。ヌルセクターの目的は一体何なのだろうか。

オリーサがエフィの肩に手を添えて言った。

「エフィ、どうしますか？」

爆発が道路を揺さぶり、車から火があがった。

「わからない」

それは敗北宣言に等しかった。

「あなたはエフィ・オラデレです」

オリーサは言った。

「ナンバー二の英雄です。私たちの使命はこの街を守ることです。私たち以上の適任者はいません」

エフィは濁いた笑いを漏らした。

「違うよ、オリーサ。わたしはナンバー二を守るヒーローを“作った”だけ。ラボがなければ、科学が

なければ、わたしは悪いやつらも人殺しも止めることなんてできない。ただの役立たず……まったくの役立たずなの」

「いいえ」

オリーサは優しくも強い口調で言った。

「役立たずなんてとんでもない。あなたは天才です。私を作った。ドゥームフィストを倒した。あなたが解決できない問題など私は見たことがありません。だから考えるのです、エフィ。考えて」

エフィはオリーサの目を見つめ、悲しげな笑みを浮かべた。もしこれが2人の終わりだとしても、エフィはその瞬間を友人と過ごすことができ本望だと思った。そしてオリーサ誕生までの日々を思い返した。素晴らしいロボットにするため、プログラミングとデバッグを延々と繰り返したあの日々。強く、賢く、好奇心旺盛で、タフで、ジュニと違ってウイルスのハッキングにも負けず――。

「ウイルス！」

エフィは飛び上がって叫んだ。

「ウイルスだよ！ジュニを感染させるウイルスを作ればいいんだ！」

オリーサは首を傾げた。

「ウイルス……意味が分かりません」

「団結の日の数週間後、ジュニがマルウェアに感染したときのこと覚えてる？ほら、出荷分をリコールしてデバッグする羽目になったでしょ？防衛アップグレードをウイルスのように書き換えれば、ジュニ同士でファームウェアを自動で上書きできる。つまりアップグレードを感染させるの！」

エフィは顔をしかめた。

「でも……全台同じネットワークに接続する必要がある」

エフィはうなった。ジュニがウイルスに初感染したとき、今後の感染を未然に防ぐためにフェイルセーフを作っていたからだ。ジュニが同じネットワーク上にいなければ、他のジュニに感染を拡げることにはできない。ここへきてフェイルセーフが仇となってしまった。

「でも、一筋縄でいくわけないもんね」

エフィはつぶやいた。

「何と言いましたか？」

そう言うと、オリーサはまた戦闘ロボットを破壊した。バラバラになったロボットの部品が宙を舞う。

「何でもない」

エフィは両手をこすり合わせた。

「やるっきゃないよね」

エフィはさっそく行動を開始した。ジュニが当時感染したウイルスから使えそうなコードを抽出し、防衛アップグレードに移植する。それと同時に、手元のデータパッドを一時的なネットワーク・プロバイダーとして使えるようにするためのプロセスを同時進行で進めた。

「ジュニを持ってる人！ジュニをできる  
だけこっちに近づけて！」  
エフィは言った。  
「ジュニが戦えるようになるアップグ  
レードが完成したの。ジュニがあなたを、  
そしてこの街を守ってくれる！」

「時間がかかりそうですか？」

前方から襲い来る戦闘ロボットたちをフュージョン・ドライバーで粉碎しながらオリーサが尋ねる。

「そう長くはここも——」

「できた！」

エフィは言った。

現在この範囲内には約300体のジュニがいて、それが画面上に赤い点で示されている。エフィが起動ボタンを押すと、一番近くにいたジュニがアップグレードに感染した。戦場から持ち主を退避させていたそのジュニは一旦停止すると、コンバット・スタンスをとり、エネルギー・シールドを展開する。

「ジェームズ・ジュニア？」

ジュニの持ち主が尋ねた。

「みんな！」

エフィは車の上に立つと大きな声で叫んだ。

「聞いて！」

「あの子だ！」

誰かが叫んだ。

「エフィ・オラデレだ！」

「ジュニを持ってる人！ジュニをできるだけこっちに近づけて！」

エフィは言った。

「ジュニが戦えるようになるアップグレードが完成したの。ジュニがあなたを、そしてこの街を守ってくれる！」

興奮、そして希望が波のように人々のあいだに広がっていった。ネットワークに接続されたジュニが増えれば増えるほど、アップグレードは凄まじい速さで拡散していった。そう、まるでウイルスのように。エフィが再び画面を見ると画面は緑色で埋まっていた。

エフィは笑った。

「命令を！」

エフィは叫んだ。

「ジュニに戦うことを命じるの！ナンバー二のために！」

ナンバー二の人々たちが口々に発する命令を受けたジュニたちが、エフィの周りで次々とヌルセクターの戦闘ロボットを攻撃し、数で圧倒していく。エフィは、サンドイッチを台所のカウンターに置き忘れた時に見た、アリの大群が群がる様子を思い出していた。オリーサは歓喜の声をあげながら戦闘ロボットの脚を掴み、棍棒のように振り回して他のロボットたちを吹き飛ばしていく。ブラスターが耳をかすめ、エフィが身をかわしながら振り向くと、すでにジュニが攻撃を仕掛けてきた戦闘ロボットをバラバラに破壊していた。

大歓声が上がリ、エフィが歓声の方を振り返ると、防衛隊が通りに押し寄せていた。そして、サテライト大通りが戦闘の舞台となった。勇気を取り戻したエフィは大通りに戻り、できるだけ多くの民間人を避難させる。

戦闘は長引いたが、やがて戦闘ロボットたちは一掃され、ガラクタの山と化した。オリーサがジュニたちを率いて防衛隊と戦線を広げていくと同時に、街を守るジュニの数もさらに増えていった。

「ナンバー二！」

誰かが叫んだ。

「ナンバー二！」

1人また1人と、生存者たちが唱和を始める。エフィは汗だくで疲れ切っていたが、興奮に駆られて街の人々の声に加わり、声が枯れるまで大声で叫び続けた。そして瓦礫の上に腰を降ろし、人々を眺める。

しばらくすると、オリーサが戻ってきた。

「どうかしましたか？」

オリーサはエフィの顔を見て尋ねた。

「何でもない」

エフィは言った。

「でも本当に……本当にもうヌルセクターの援軍は来ないかな？私たち本当にヌルセクターをやっつけたの？」

オリーサは大きな肩をすくめるように動かした。

「あれでは物足りない？」

「まさか。援軍なんてまっぴらだよ」

「私は構いません」

オリーサは倒した戦闘ロボットの腕を握りしめている。

「私の使命は守ることです。私はその使命をいつだって果たします。ですが今回は私たちの勝ちです。エフィ、私たちは皆で勝利を勝ち取ったんです。ナンバー二の勝利です。今は勝利という名の贈り物を喜びましょう」

「クサイこと言うようになったんだね、オリーサ」

---

もう何度目になるだろうか。エフィは枕をふくらませ、枕の上に倒れこむ。寝返りを打っては、眠りにつけそうな体勢を探し続けた。エフィは布団に潜ると、今度は布団を床に放り投げ、上体を起こした。今夜はどうせ寝られない。そう思うと、寝ようとする努力がバカバカしくなった。

エフィは街の後片づけを手伝ったり、怪我人を救急車に運ぶ手伝いをしたかったのに、両親に家へと連れ戻されてしまった。もう13歳になるというのに、両親はエフィのことを子ども扱いする。それが両親の愛情であることもエフィは知っていた。エフィの姿を見た時、母は涙をこらえてエフィを抱きしめた。最悪の事態も想像していたのだろう。

エフィはナイトスタンドの上に置かれたリモコンに手を伸ばし、テレビをつけた。

炎に包まれるリオの映像を背景に、「オーバーウォッチ、リオを守る」という見出しがテレビの下に流れた。次の映像には、エフィが昔アニメで見たことのある顔ぶれが映し出された。中には新しい顔ぶれも。

「ルシオ！」

ベッドから飛び起きながら、エフィは叫んだ。

「皆、帰ってきたんだ！」

しかし、底知れぬ不安に襲われ、束の間の興奮から醒める。そのニュースが意味していることは1つ。襲撃されたのはナンバー二だけではなくだったのだ。ヌルセクターは全世界にとって深刻な脅威であり、オムニック・クライシス以来最大の脅威となる可能性すらある。

ナンバー二に敵の増援が来なかったことにも説明がつく。どこかでオーバーウォッチがヌルセクターと戦っていたのだ。

---

「そうだった」

窓から屋根の上によじ上りながら、エフィは言った。

「あなたも寝られなかったのね」

# 「ヌルセクターは私たちの故郷を メチャクチャにした」 エフィは言った。 「だからこそ、 私たちはここに留まるわけにはいかない」

オリーサは屋根の上に立ち、街を眺めていた。

「私は眠りません。ご存知でしょう」

「プログラムをアップデートして、眠れるようにすることもできるけど？」

「エフィ・オラデレ。アップグレードなら、破壊兵器の追加をお願いします。朝でも昼でも夜でもヌルセクターを倒せるようなやつを」

エフィはくすくす笑いながら、オリーサの隣に腰を下ろした。

2人は煙とサイレンに満ちた街を見下ろしながら、しばらく親友同士の心地の良い沈黙を楽しむ。防衛隊は引き続き厳戒態勢を敷いていたが、ジュニのアップグレードが完了した今、人々はより安全に暮らすことができるだろう。火災のほとんどは消火されたが、日の出とともに本当の被害の大きさ、そして復興に必要な労力が明らかになるだろう。

「ヌルセクターは私たちの故郷をメチャクチャにした」

エフィは言った。

「だからこそ、私たちはここに留まるわけにはいかない」

オリーサは無言のまま、今何を思うのか読み取ることができなかった。

エフィはため息をついて目をこすった。

「オーバーウォッチが帰ってきた。リオを救ってくれた。わたしは……一緒に戦うべきだと思う」

「彼らは私たちの助けを必要としていません」

エフィはオリーサのあまりの頑固さにうなった。

「ドゥームフィストを倒したあと、ソジョーンに会いにいったときのこと覚えてるでしょ？あの時、ソジョーンに言われた言葉を覚えてる？」

「自分の使命を知り、その使命を見失わないように」

オリーサは言った。

「私の使命はナンバー二を守ることです。私たち以上の適任者はいません」

「わたしたちは使命を果たした」

エフィは言った。いつも言い合いになってしまうから、エフィはこの話題にはうんざりしていた。しかし、ここで決着をつける必要があった。

「わたしたちはナンバー二を守り抜いた。でも、これはオリーサや私、それにナンバー二だけの問題じゃない。世界の危機なの。ヌルセクターが復活した。それも前より強くなって戻ってきた。今日だって勝てたのはギリギリだったし、それに……今度のあいつらのリーダーは恐ろしいだけでなく賢い。自分たちの街だけのことを考えて、ここに隠れるなんて勝手すぎるよ」

エフィは、今も尚ヌルセクターの攻撃にさらされ、炎に包まれるケープタウンとイスタンブールの様子が流れる巨大なホロスクリンを指さした。

「あんなに助けを必要としている人がいて、私たちは助ける力がある。わたしは思うの……この街での使命はいったん果たし終わったって」

「そうかもしれませんね」

オリーサはそう言って両腕を上げ、言葉に詰まると、腕を横に下げた。

「私はただ——」

エフィはオリーサに寄り添い、肩に手を置いた。

「あなたのナンバー二を想う気持ち、わたしは大好きよ。だけど、もうナンバー二は大丈夫。今ではすべての家庭にジュニが置かれた。あの子たちの防衛システムは、あなたの戦闘から得られたデータで作ってある。あなたの留守中も、必ずこの街を守ってくれる」

「ジュニは私の小さなクローンということですか？」

「オリーサ、あなたは唯一無二の存在だよ。わかってるでしょ。そうだな……ジュニは兵隊であな

たはその指揮官ってとこかな」

オリーサはしばらく黙った。

「そのとおり」

オリーサの声には嬉しさが混じっていた。

「私は唯一無二の存在です」

エフィはオリーサをちらと見た。

「言うまでもありませんが……ジュニは私のように機転が利きません」

エフィは笑った。

「それにあなたほど“個性的”でもないしね」

オリーサは誇らしげだった。

はるか彼方で日が昇り、ヌルセクターの襲撃を生きのびた街の地平線に幾筋もの光が伸びた。多くの人が傷付き、救えなかった人々のことを思うと、エフィの心は痛んだ。しかし、これは始まりに過ぎない。この命の灯が消えるまで、エフィは戦いつづけることだろう。エフィは目を閉じて空を仰ぎ、

慣れ親しんだ故郷の匂いを深く吸い込むように深呼吸する。目を開けると、オリーサが期待に満ちた眼差しでエフィを見つめていた。

「それじゃ」

エフィは立ち上がって言った。

「行こっか」